

はしがき

『南方録』は通常〈本録〉と〈続録〉からなつており、〈本録〉は「覚書」「会」「棚」「書院」「台子」五巻に「墨引」「滅後」を合わせた七巻、〈続録〉は「秘伝」「追加」の二巻とされている。そして〈本録〉の五巻は、貞享三年（1686）に利休の高弟南宗寺の南坊宗啓が聞き書きしていた秘伝書を安芸国蒲刈で実山が筆録し、「墨引」と「滅後」は利休百年忌にあたる元禄三年（1690）に再び江戸で筆写したといふことになっている（『岐路弁疑』）。以上のようなことから、『南方録』は利休茶法の秘伝書であり、茶道の聖典とまで言われた時代があった。日本史の泰斗中村直勝ですら、『南坊録に学ぶ』（昭和二十九年）や『茶道聖典南坊録』（昭和四十三年）と題する著書を出版されるほどであった。

その一方、成立についての疑問を呈する学者も多く、早期では堀口捨己が昭和十六年の論文「利休の茶」で、西堀一三は昭和十九年の『南坊録の研究』で批判を行つてゐる。明治時代後半から茶道改革運動に努めた田中仙樵も、疑惑を感じながらも『喫茶南坊録講義』を六十年近くにわたつて続け、曲尺割研究に生涯を捧げた。戦後になると小宮豊隆が『茶と利休』（昭和三十一年）に「『南方録』の真偽」の論考をいれたことによつて真偽論争が再開されて、熊倉功夫による「『南方録』成立とその背景」（『茶湯 研究と資料』第十一号 昭和五十一年）に至つてゐる。

いま見た通り、『南方録』は、江戸時代にあつては筆者とされた南坊宗啓の名に因んで『南坊録』と書

かかる場合と、博多崇福寺の古外宗少の命名による『南方録』と外題される場合とに分かれて使われていた。実山が秘本としてきた『南方録』であるが、宝永二年（1705）に実山が実弟の寧拙はじめ四人の門弟に筆写を許可したことで拡散が始まった。実山没後の享保三年（1718）に福岡藩士笠原道桂の懇望で筆写を許す際の奥書に「南坊録」と書かれていたため、江戸時代には『南坊録』の名で伝写され、各書に引用・収録されていった。

ところで、今や『南方録』は利休の高弟南坊宗啓が聞き書きしたものだったのかと問われたら、「否」と答えなければならない。福岡藩家老立花実山（1655—1708）による創作と断じなければならない。すると『南方録』は、利休茶法研究の第一級資料から陥落することになる。替わってその座を射止めたのは『山上宗二記』であり、『松屋会記』『天王寺屋会記』『宗湛日記』などの茶会記である。では、『南方録』はいかなる価値を有する茶書なのだろうか。利休没後百年を経過した元禄時代の茶書とはいえ、江戸時代を通じて利休を顕彰する書の第一は、『南方録』を措いて外にない。そうした意味からみれば、利休茶法を研究する史料としては聊かも価値を落としてはいないといえよう。

私事ではあるが、かつて早稲田大学大学院で学んでいたとき、博士課程へ進学するにあたって『南方録』を選ぶことを指導教授であった佐々木八郎先生に申し上げた。ところが『南方録』は、国文学中世研究の対象には価しないからテーマを変更するようにという指導を受け、卒論以来茶道研究を目的としていたために進学をあきらめることにした。『南方録』は淡交社の『茶道古典全集』第四巻（昭和三十一年）に久松真一の校訂で収録されて、利休研究の筆頭資料とされていたが、今思えば先生の言われることも当然のこと

とであつた。しかしながら、『南方録』に新しい光を与える役割を果たしたのは岩波書店発行の『日本思想大系61 近世芸道論』（昭和四十七年）に収録されたことである。校注・解題を担当されたのは西山松之助先生であった。岩波の思想大系に収録されたことによつて『南方録』の研究対象は大きく広がり、歴史学・哲学・文学の研究対象として認知されることとなつた。

現在、若い研究者によつて『南方録』の微細な分析がされるようになつたのは大いに是とするところであるが、福岡藩家老立花実山による元禄時代の創作であることを認識したうえでの研究でなければならぬことを改めて申し添えておきたい。そのことを忘れて利休を論じたとすると、光悦・宗達らを描いた辻邦夫の小説『嵯峨野明月記』を歴史的事実と勘違ひして引用した研究者と同様の誤りを犯すことになる。

本書では『南方録』〈本録〉と〈続録〉のほか、すべて立花家本を底本とさせて頂いた。そして、実山名の茶書として『喫去又録』『実山茶湯覚書』『南方続録』の「壺中炉談」・「岐路弁疑」を取り上げ、実山の弟寧拙が書いた『南方喫去続録 寧拙覚書』『松夢上人茶話』を収録した。『喫去又録』『南方喫去続録 寧拙覚書』『松夢上人茶話』の三件は公刊本としては初翻刻となる。最後に、私のたつての希望で実山の獄中日記『梵字艸』を収録させてもらつた。予定の頁数を超えるにも拘わらず容認して頂いたことに感謝したい。かつて文学者松田修によつて「自己表白の文学」であると評された『梵字艸』こそ、立花実山が『南方録』の著者であることを証する第一史料と考えるゆえんだからである。

目次

南方録	翻刻	筒井紘一	校注	矢野環
覺書				
会				
棚				
書院				
台子				
墨引				
滅後				
秘伝				
追加				
289	277	222	176	117
30	30	30	30	30
14	14	14	14	14
10	10	10	10	10
710	696	664		
314	399	399		
404	424	424		
446	570	570		
584				
立花実山略年譜				
解題				
收録茶書総合索引				

筒井紘一	翻刻	筒井紘一	校注	矢野環
石塚修	翻刻	筒井紘一	校注	矢野環
石塚修	翻刻	筒井紘一	校注	矢野環
石塚修	翻刻	筒井紘一	校注	矢野環
石塚修	翻刻	筒井紘一	校注	矢野環
〔参考史料〕梵字艸				
立花実山略年譜				
解題				